

農業協力

No.

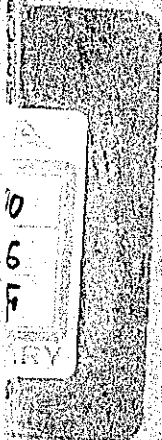
部内参考資料

発展途上国における地域開発と援助
の戦略及び実施についての研究
(中間報告書)

—新時代の地域開発と援助を目指して—

昭和47年5月

海外技術協力事業団
農業協力部



JICA LIBRARY



1005263[7]

国際協力事業団

受入 月日 84. 5. 21	000
登録No. 06310	36
	AF

は し が き

発展途上国の開発と援助に対する理論的アプローチは各方面の専門家によってなされてきた。この研究会ではこの論を一步進めて「地域開発と援助」の理論的体系化を行い、実施との合一を図ることを目的とする。昭和46年9月から昭和48年3月までを目標に調査、分析、評価を進めていく予定である。研究テーマはピアソン委員会報告、「開発と援助の構想」とはアプローチの方法を異にしたものであり国際的な比較で開発論を論ずるのではなく発展途上国の地域そのものに後進性の原因があるとして地域の開発を採求するところに大きな特徴を有している。理論的体系化の基本としてGunnar Myrdal, Ragnar Nurkse等により定義されている発展途上国のもつ後進性と悪循環をとりあげ、また「Take-off」の理論として参考のためにW. Rostow の考え方をとりあげることとする。地域開発と援助の実態については海外技術協力事業団により計画・実施されたプロジェクトの分析を行った。

理論と実践の体系化は単に資料解析によって完成されるべき性質のものではない。しかし、これまで発表されてきた「発展途上国論」を集約し、同時に理論に先行して実施されてきた援助の反省より真の開発と援助に挑戦することは大いに意義のあることである。

分析を進めていくにあたり、これまでの国内の地域開発での経験を生かしSystems Analysis, Operations Researchの手法をフルに活用する予定である。

今回の報告書は中間報告書であり、未だ十分な検討が成されていないが、我々の目標とする方向については明確に記したつもりである。

なお、この研究会はネパール王国の地域開発を目的として発足し、ネパールの農業開発プロジェクトについて具体的なアプローチを実施するが、将来他の発展途上国に対しても論を広げてゆく所存である。

農 業 協 力 部

ネパール地域開発研究会

目 次

第 I 編	総 論	1
第 1 章	発展途上国について	2
1 - 1	後 進 性	2
1 - 2	「Take-off」の理論	4
1 - 3	開 発	7
1 - 4	地 域 開 発	8
1 - 5	援 助	8
1 - 6	地域開発と循環体系	9
第 2 章	研究計画と考え方	11
2 - 1	研究計画の目標	11
2 - 2	分析項目	11
2 - 3	要素体系総合化の方法	11
2 - 4	評価基準作成	13
2 - 5	実施のための戦略	13
2 - 6	実施への活用	13
第 3 章	作業計画	14
第 II 編	各 論	19
第 1 章	地域開発の循環系	19
1 - 1	定 義	19
1 - 2	体系と分析	19
第 2 章	住民の価値体系	22
2 - 1	価値観と価値体系の定義	22
2 - 2	行動分析	24
2 - 3	社会構造と価値体系	25
2 - 4	社会的性格と価値体系	26
2 - 5	価値体系と分析評価の方法	27

第 3 章	地 域 機 能	31
3 - 1	地 域 と は	31
3 - 2	地 域 機 能 の 定 義	32
3 - 3	地 域 機 能 の 構 成 要 素	36
第 4 章	地 域 開 発 構 成 要 素 の 総 合 化 に つ い て の 試 み	45

第 I 編 総 論

総論では、発展途上国に対する我々の考え方を明らかにし、同時に研究の方法及びスケジュールを示す。

第1章「発展途上国について」では、発展途上国の持つ後進性について論じ、研究計画の〈構想〉である「Take-off」の理論をとりあげる。「Take-off」と地域開発の位置をこの節で明示できるものと思う。

次に発展途上国の開発を側面から支えるものとして、援助を定義し、終節で「地域開発と循環体系」の国際的環境及び国家的位置について論ずる。

第2章では研究の目標と分析に必要な要素をとりあげ、研究の Approach の方法を説明する。取り上げられた要素は第1章の「発展途上国について」の分析（理論と資料解析による）から抽出されたものである。

各論では分析に必要な各要素「地域開発の循環系」、「住民の価値体系」、「地域機能」の三要素について定義し、地域開発構成要素が「何であるか」を明らかにした。そしてこの要素総合化を試みたのが第4章である。しかしこれは「試み」であって総合化の手法を示したものであり将来はこの手法により総合化を完結させる。

地域開発が総合化されたあと、援助との絡み合いを考える必要があるが、作業上の理由により、次回のレポートで報告する。

第1章 発展途上国について

1-1 後進性

一般に先進国と発展途上国の比較により後進性が論じられているが、まず経済現象に顕著にあらわれているものとして、

- a) 一人当り所得が低い
- b) 低い所得成長率(停滞的, 下降的)

があげられる。

後進性に関わる問題点と考えられるものを列举すると、

1) 悪循環

- a) 貧困
- b) 貯蓄
- c) 投資
- d) 市場規模
- e) 過少雇用
- f) 産業構造
- g) 生産の不安定
- h) 外貨不足
- i) 衛生
- j) 教育
- k) 人口圧力

2) 閉鎖的因襲的社会構造

3) 意志と意識

- a) 開発意欲
 - b) 拒絶反応
 - c) 国民的統合
- 4) 政治不安及び行政の能率
 - 5) 管理能力, 計画性
 - 6) 技術
 - 7) 所得配分
- 等である。

これらの指標は発展途上国の開発計画を作成する場合必ず考慮に入れるべきものであるが, “地域開発” 計画と国家レベルの “開発” とでは, かなり意味合いが異なってくると思われる。

後進性を表わす興味ある循環過程, 悪循環について若干の考察を試みることにする。

Ragnar Nurkse⁽¹⁾は「貧困の悪循環」についてつぎのように述べている。「この概念はもちろんある貧困な国を貧困の状態にとどめておくような仕方ですら互に作用し, 反作用する傾向をもつ諸力の循環的な座標を意味する。そのような循環的座標の特殊の事例は想像するにたたくない。たとえば貧乏人は十分な食物がないかもしれない。栄養不足であるために彼の健康は弱いかもしれない。肉体的に弱いために彼の労働能力は低いかもしれない。それは彼が貧困であることを意味するし, それはまた彼が十分な食物がないことを意味するだろう。以下同じである。この種の状況は, 一国全体に当てはめるならば, ごくありふれた次のような命題にまとめることができる。『ある国は貧困であるがゆえに貧困なのである。』」また,

O. E. A. Winslow⁽¹⁾によれば「貧困と疾病がひとつの悪循環を形づくることは明らかであった。男や女は貧困であるがゆえに病気にかかっていた。彼らは病気であったためますます病気になった。」

Gunnar Myrdal⁽¹⁾は、この2つの説を引用しながら循環について次のように述べている。「生活水準を絶えず押し下げるようなひとつの循環的ならびに累積的過程に注意するのであって、そのような過程においては、ひとつの消極的要因は同時に他の消極的要因でもあり結果でもある。」さらに言及して「貧困の減少、より多くの食物、健康の改善、より高い労働力等の循環的相互関係は累積的過程を下方に向ってではなく上方に向って持続させるであろう。」

発展途上国の地域開発を進める場合、この上向きの循環体系をはっきりとらえるべきであり、それを完結させることは開発にとっての必要条件である。この発展的な体系を構成する要素は、

- ① 地域開発の循環系
- ② 住民の価値体系
- ③ 地域機能

である。この三大要素を総合的に体系化し、不安と混乱を生じぬように「Take-off」の基盤を築くことが、地域開発にとっての必要十分条件である。

1-2 「Take-off」の理論

発展途上国の低開発性を論ずる場合、すでに開発の基盤ができ、加速度的に前進する先進国との比較論がしばしばとりあげられる。すでに「Take

off] の段階を乗り越し、自立的な発展過程に到達している先進国と、
「Take-off」するための手段・方策に苦慮している発展途上国の開発基
盤における格差はあまりに大きすぎる。発展途上国の開発にとって「自立
とは」あるいは「Take-offとは」の疑問に答えることが必要不可欠で
あり、これは後進性からの脱却を意味する。

ここで参考のために、W.W.Rostowの「Take-off」の理論⁽²⁾をと
りあげることにする。(我々のアプローチの方法は必ずしもW.W.Rostow
の指摘する5段階における「Take-off」と一致するものではない⁽³⁾)

「先進国が自動的・自生的過程 (automatic and self-generating
process) として着実に持続的に将来に向ってみずからの成長に依存し
るのに対し、低開発国にはそれぞれができない。これは先進国が集中的
な経済発展の局面・離陸 (take-off) を乗り越し、その間に自生的成長
メカニズムを経済構造の中に組み込んでいるのと対照的に低開発国の経済
成長はたとえそれが急速であるときでも一時的散発的な傾向を有し、始発
誘因 (initial incentives) がつき果てると止まってしまうからであ
る。たとえば発展途上国の経済が一次産品輸出の拡大により急速に成長し
ているとしても、その輸出品の生産に適した天然資源が使い果されるとか、
あるいはその輸出品に対する世界市場の需要の伸びが止まってしまうかの
理由で、遅かれ早かれストップしてしまうであろう。いいかえれば、その
成長は収獲遞減のためか、あるいは新しいタイプの経済活動に切り替える
ことができないかの理由でストップせざるを得なくなるであろう。」

「Take-off」のためには貯蓄率、投資率を高めることが必要であるが、
問題はその貯蓄がいかにか生産的に投資できるかということである。貯蓄お

よび投資に必要な誘因 (incentives) として次のような要素が考えられる。

- ① 国民の熟練度と態度
- ② 経済組織の能率と弾力性

これらは計量困難な質的要素の複合体に依存する。先進諸国はこれらの「離陸」のための先行条件 (pre-conditions for the take-off) を作り出すために一世紀またはそれ以上の「長期間」をかけた。

発展途上国にとって離陸先行期 (pre-take-off period) の短縮は緊急な当面の課題である。しかし早まって離陸させることの危険は、少なくとも離陸を遅延させることの危険と同じように大きい。それは不適當または非能率的に投じられる資源の浪費であるだけでなく、深刻な心理的、政治的不安を生み出す可能性がある。それが失望と挫折感をもたらすことになる。

「Take-off」への道として、自主的成長メカニズムの必要性とその源となる「要素の構成」を明確にするとともに、急激な「変化」により派生する社会不安すなわち住民の価値体系の破壊については充分注意すべきである。要素としては成長を特徴づける「地域開発の循環系」、開発の本源的要素である「住民の価値体系」および平面的な機能分化を決定する「地域機能」をとりあげる。新しい投入がなされたとき、社会が「Take-off」のための条件を整え、現在の住民の価値体系が新しい成長の体系へと変身することが期待される。

1-3 開 発

発展途上国の開発とは現在の「後進性」を打破し、新しい発展性のある循環体系を確立することを意味する。これがすなわち、自主独立の道を歩むための「Take-off」の確立である。

開発を論ずる前に考えるべきことは開発の対象となる地域の住民が真に伝統的な社会を破壊してまでも開発を望んでいるかどうかということである。先進国において近年大きな問題となっていることであるが、国家の経済開発（日本では「新全国総合開発計画」が徐々に実施されている）計画と住民意識との摩擦が社会問題として深刻な波紋を投げかけている。

伝統的に村落と変化の激しい都会でどちらが不満度が高いかという点、必ずしも所得水準の低い村落社会の方であると断言することはできない。また比較することも困難である。発展途上国の住民の持つ伝統的価値体系と先進国の意識構造を比較対象しながら開発の体系を確立することにはいささか危惧の念を禁じえない。住民が何を望み何を嫌っているかを考え、これを開発のための循環過程の中に組み入れることにより解決への道が見い出せると考える。

開発計画は長期的性格のもので、その効果が現われるまでには相当な時間的ズレ（time-lag）があるはずである。急激な変化は住民に利益をもたらさないばかりか、かえって混乱と損失を生じうる可能性も大きい。

開発の効果について、Gunnar Myrdalの言⁽¹⁾をとりあげると「正常の場合においては社会体系における自動的自己安定化に向うそのような傾向はないのである。体系はそれ自体では諸力間のなんらかの種類の均衡に向って動いているのではなく、むしろつねにそのような状況から乖離する

動きをとっている。正常の場合においては、ある変化は平衡的な変化を引き起こすのではなく、むしろ反対に最初の変化と同じような方向に、しかしさらにすすんで体系を動かすような促進的な変化を引き起す。そのような循環的な因果関係のためある社会過程は累積的となり、またしばしば加速度的な度合で速度を早めるのである。」変化し発展する循環体系を求めると開発計画を作成することに本質的な差異はないのである。

1-4 地域開発

地域開発とは住民を中心として開発を論ずることである。それは「地域開発の循環系」、「住民の価値体系」および「地域の機能分化」を総合化した循環体系の確立により達成されるものである。

地域開発の目標は「Take-off」のための基盤づくり、すなわち2つの基盤、生産・輸送・生活の物的基盤と住民の価値体系としての社会的基盤の確立である。

地域開発のために最も重要な項目をあげると、

- a) 「Take-off」のための新しい循環体系の確立
- b) 新しい投入による「変化」の予測

となるであろう。

1-5 援助

援助は、「Take-off」の先行期と「Take-off」の基盤が確立した後では意味を異にする。先行期には、発展途上国の開発関係者（政府および住民で組織される）の意向を充分考慮した上で、積極的なプロジェクトコ

ントロールを行なう。自立の基盤ができあがった後は補足的なアフターフォロー（側面援助）を継続することに援助の意義がある。

これまでの援助の規模と発展途上国の成長との相関が低いといわれているが、ピアソン委員会の「開発と援助の構想」⁽⁴⁾では、次のような項目をその原因としてとりあげている。

- ① 援助が本質的には政治的基準で配分された。
- ② 経験の不足
- ③ 先進国の輸出促進，融資の手段として利用された。

これらは援助の本質と開発のもつ意味の合一をとり違えることにより生じたものである。

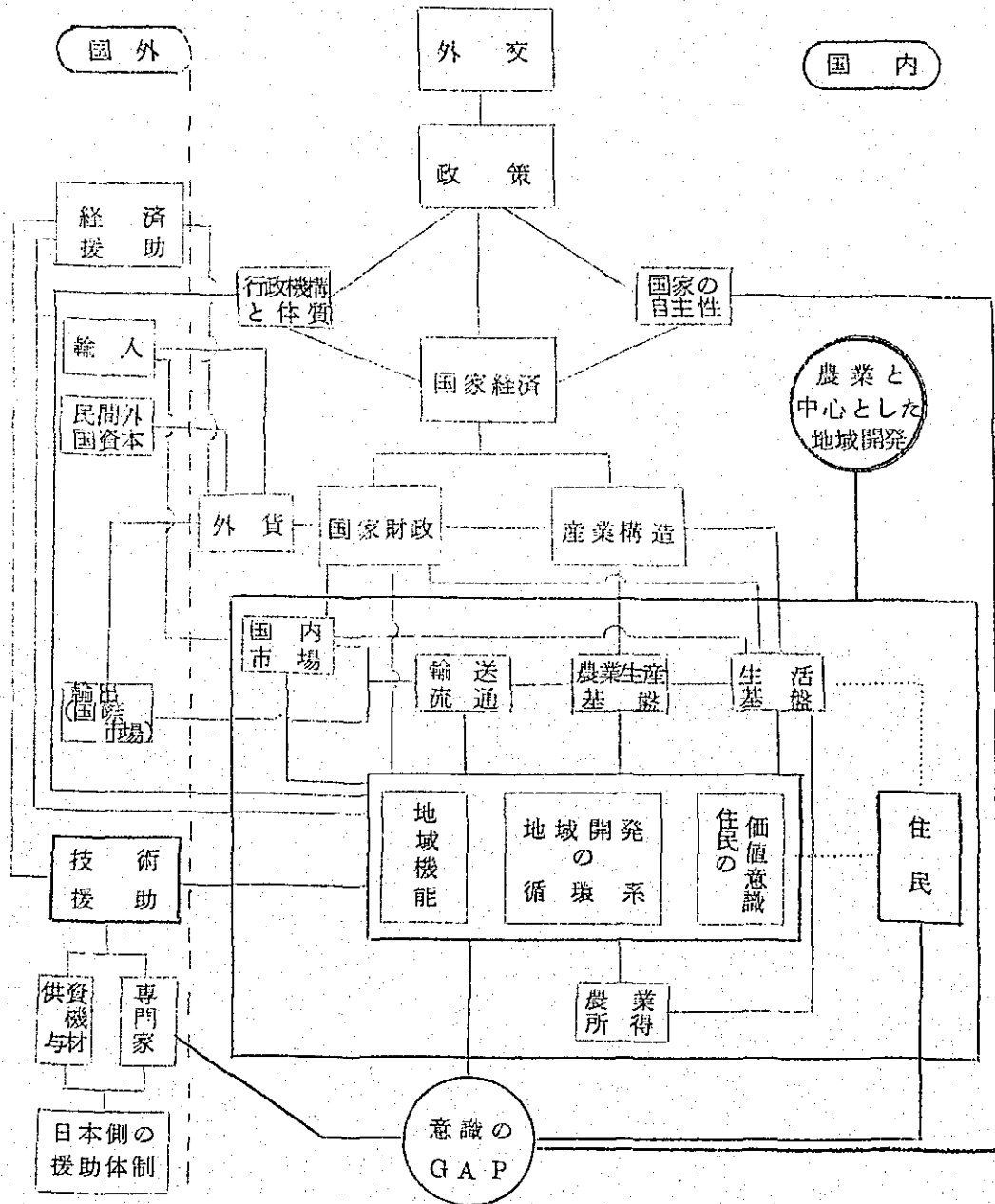
援助を構成する要素としては次の3つをとりあげる。

- ① 先進国側の援助機能
- ② 発展途上国側の受け入れ機能
- ③ 派遣専門家の援助機能

1-6 地域開発と循環体系

これまで述べてきたことをまとめたものがFig. 1である。フローの右側は発展途上国の国内開発であり，左側は外国との関係すなわち貿易・援助を表わしている。両者の関係は実線で示してある。この中で今後とり上げる部分は「農業を中心とした地域開発」であり，この循環体系を確立することが研究の最終目的である。この体系を構成する要素が地域開発の循環系であり，住民の価値体系および地域機能である。この体系は意識のGapあるいは体系の変化を通してチェックされるのである。

Fig. 1 地域開発と循環体系及び国家と援助の位置



第2章 研究計画と考え方

2-1 研究計画の目標

- ① ネパール王国における農業開発を中心とした最も効果的・地域開発計画の策定及び戦略の作成
- ② 日本からの最も効果的な技術協力計画と協力実施のための管理運営計画の作成

2-2 分析項目

分析すべき項目は「地域開発」と「援助」に分けられる。

1) 地域開発

- a) 地域開発の循環系
- b) 地域住民の価値体系
- c) 地域機能

2) 援助

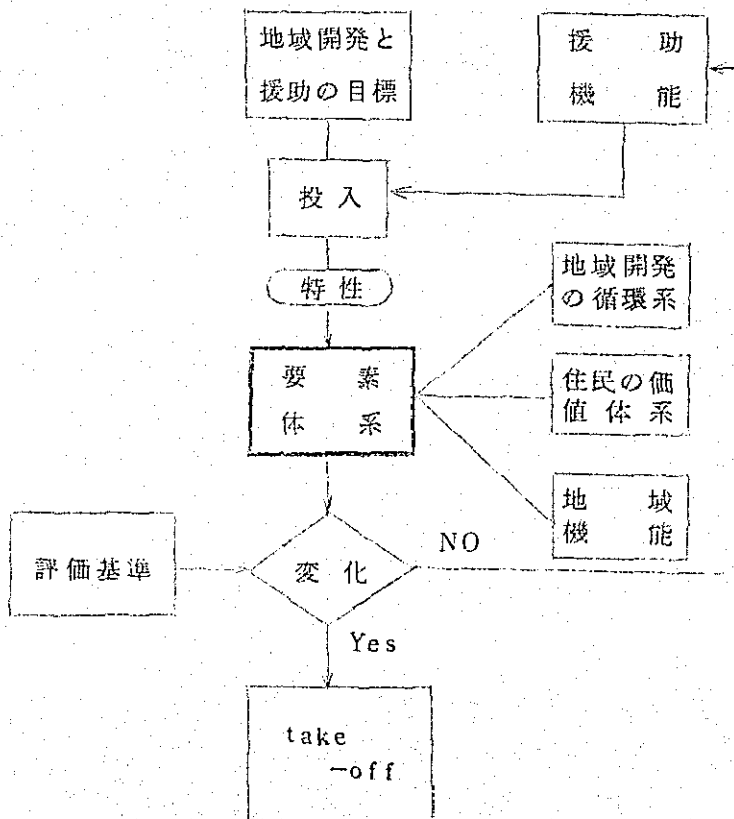
援助機能

これらの要素は最終的には集約されてひとつの体系に組み込まれる。

2-3 要素体系総合化の方法 (Fig. 2 参照)

- a) ネパール王国における農業を中心とした地域開発と技術協力の目標を明確にする。
- b) 投入の特性分析
- c) 要素の体系化

Fig.2 要素体系の総合化の方法



分析すべき項目としてあげた4項目を別々に独立したものとして分析し、最後に相互のからみあいを考えて、一つの大きな体系にする。これを「地域開発と援助要素体系の総合化」とよぶ。(この体系化は①「現

在の体系」を明らかにし、②「将来の体系」を予測し、③変化の仕方によりチェックする)

d) 住民の価値体系の「変化」の予測

地域開発と援助が実施されると住民の価値体系に大きな変化が起ると思われる。この変化を予測しておくことはプロジェクト評価に不可欠である。

2-4 評価基準作成

- 1) 要素の体系化のための評価基準 (Fig. 2)
- 2) 協力プロジェクトの評価基準
- 3) 援助プロジェクトの管理運営計画のための評価基準

2-5 実施のための戦略

評価を通して効率的な地域開発と援助実施のための戦略が確立される。この戦略は次のような形で現実に適用される。

2-6 実施への活用

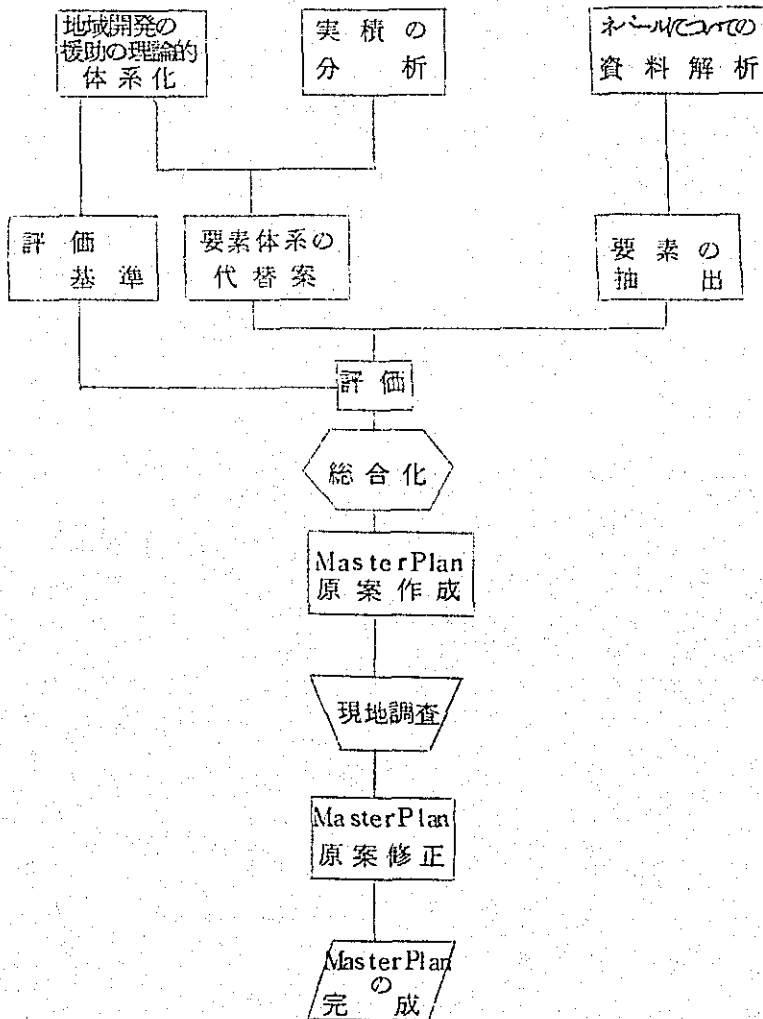
- a) 地域開発と技術援助のスケジュール
- b) 構造物建設に必要な Soft の設計
構造物の選択, 配置, 規模および建設にかかわる附帯的要素の整理
- c) 組織および管理運営体制の確立
- d) 実施に必要な資材, 資金の規模と種類の決定
- e) 人材配置

専門家およびネパール側の人材配置

f) プロジェクト実施中のチェック

第3章 作業計画

Fig.3 作業フロー



* 今回の報告書は「要素」の「体系化」を中心に展開してある。

第1段階として、まず、発展途上国の地域開発と援助に必要な要素、すなわち、後進性のもつ悪循環を規定する要素及び「Take-off」に不可欠な要素をとり出し、理論の体系化を行う。これは同時に、地域開発と援助の評価基準の理論的確立を意味する。評価基準は、要素体系の代替案作成の段階、代替案選択の段階及びプロジェクトの管理運営計画作成の段階の各レベルにおいて使われるものであり、その内容もレベルに応じて異なってくるものである。

過去においてO.T.O.A.によってなされたいくつかの実績を分析することにより、発展途上国の地域開発と援助に投入された要素及び、問題点を抽出する。次に、理論の体系化と実績の分析をとおして抽出された要素及び問題点から要素体系の代替案を作成する。この時点での評価は悪循環の打破及び「Take-off」への展開を大わくとして、とらえた評価にとどめておく。ネパールの資料分析から、ネパールにおける地域開発の目的設定及びネパールの対象地域に固有の特性を抽出する。

第1段階の作業が終了した時点で要素の総合化に入る。要素体系の代替案とネパールの分析から得られた固有の特性をすでに作成された評価基準より評価し、総合化が行われる。この第2段階の作業により、マスタープラン原案作成のためのベースが確立される。第3段階として、プロジェクトの管理運営を含めたマスタープラン作成に移る。これは机上のプランであり、ネパールの対象地域の開発に適応するにはいたってない。

国内における準備作業は、3つの段階をへて終了し、第4段階として、現地調査に入る。この調査はマスタープラン完成のためにもっとも重要なウェイトを持っている。調査が短期間であるため、調査に入る前の調査項目の選

扱は慎重に行う。この現地調査の目的は、総合化された要素の中で、ウェイトの高い要素を選択すること、及び新たな追加すべき要素の抽出が中心となる。特に「住民の価値体系」については、この調査のもつ意味が国内における資料解析よりはるかに重要なウェイトをもってくるであろう。

最後に、国内作業により得られたマスタープランの原案と現地調査により得られた成果を総合化し、マスタープランを完成させる。

尚、今回の中間レポートでは、要素体系の代替案作成のための準備作業についての報告をするにとどめている。

〔 文 献 リ ス ト 〕

- (1) 「経済理論と低開発地域」(G. ミュルダール, 小原敬士訳)からの引用。
原文は "Economic Theory and Under-developed Regions",
by Gunnar Myrdal, 1957。その他参考文献として,
* 1 "Problems of Capital Formation in Under-developed Countries," by R. Nurkse, 1953。
* 2 "The Cost of Sickness and the price of Health,"
C. E. A. Winslow, 1951。
- (2) 「低開発国の経済学」(H. ミント, 結城外邦訳)から引用(原文は
"The Economics of the Developing Countries," by H.
Myint, 1964)。W. W. Rostowの理論は "The Stages of Economic Growth," (1960) 参照。
- (3) W. W. Rostowの開発理論批判としては、松井清氏による「低開発国

作業スケジュール

	'72	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
資料解析			↔													
地域開発と援助の理論の体系化			↔													
*1 中間報告書				↔												
ネットヘル資料解析					↔											
マスタープランの原案作成						↔										
*2 中間報告書							↔									
調査項目方法の検討・準備								↔								
現地調査									↔							
マスタープラン修正										↔						
実施への活用											↔					
*3 最終報告書																↔

- *1 : 開発途上国の地域開発に必要な要素の抽出を行ない、要素の体系化を試みる。
- *2 : 「ネットヘル」の地域開発と援助のマスタープランおよび調査票原案を作成する。
- *3 : *2の原案の修正および管理運営計画の作成を行なう。
- *4 : 長期的な調査を要する項目については、次年度に補足調査をする。

経済論」等がある。

- (4) 「開発と援助の構想」(ピアソン委員会報告,大来佐武郎監訳)より引用。原文は "Partners in Development," Report of the Commission on International Development.

第Ⅱ編 各 論

第1章 地域開発の循環系

1-1 定 義

地域開発の目標は住民の価値体系を源とする発展的循環体系の確立にある。したがって地域開発を構成する要素の全体系を正確に定義することは価値あることである。循環系は四つの基盤により構成される。それらは、生活、生産、輸送・流通、市場である。住民の生活基盤により生産が行なわれ、アウトプットとしての生産物は輸送・流通過程を経て競争市場へと流れていくのである。需要・供給の均衡の下に価格が決定され住民の生活基盤となる所得が形成される。所得は住民の生産への新しいエネルギー源として再びこのサイクルにさまざまな形で投入されることになる。これが地域開発の循環系であり、循環系の各レベルで生産の増大、所得の増大およびその配分、さらには地域住民の福祉の目標が設定される。ただしこれらの目標は別々のサイクルにあるのではなく一つの流れに沿って派生してでてくるものである。これらの目標は循環系を通してアウトプットとして産出される。

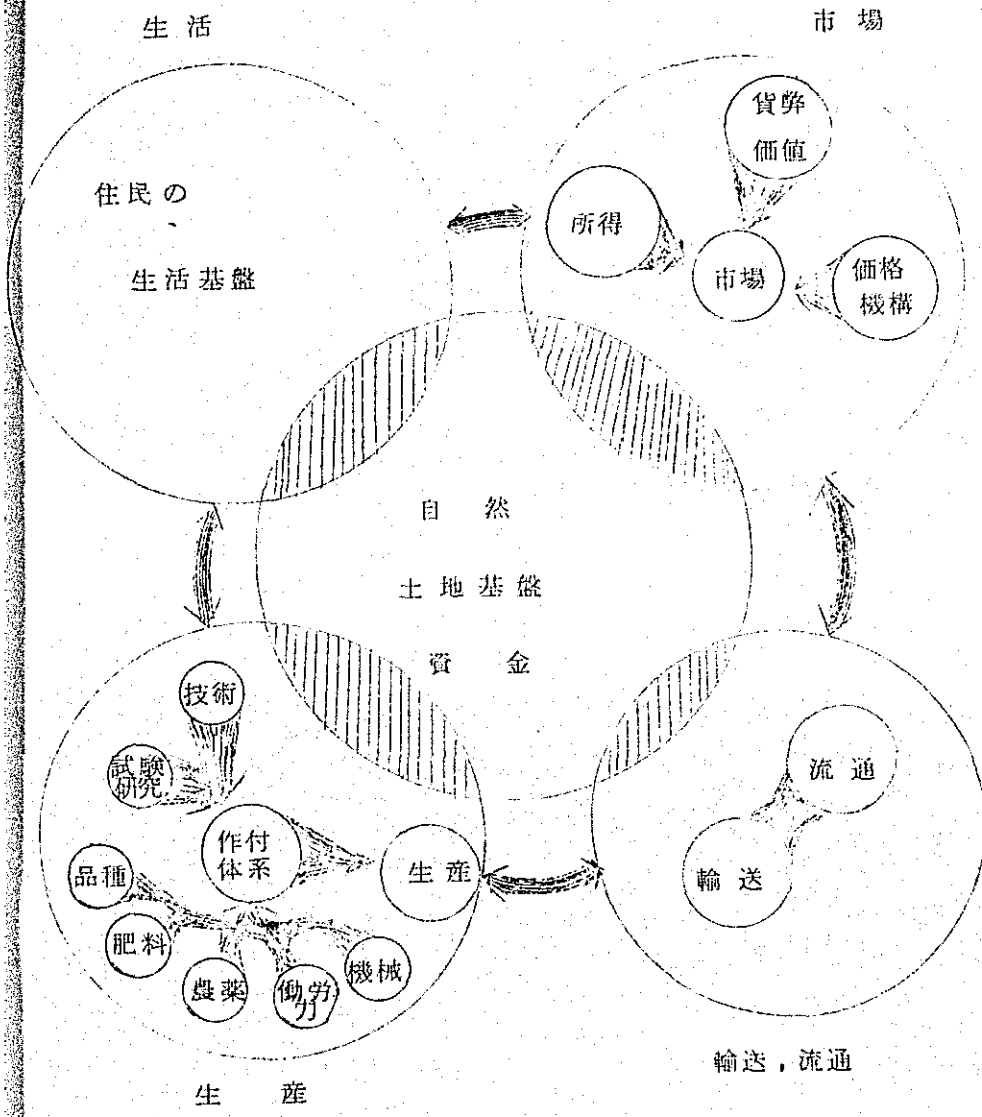
1-2 体系と分析

定義の項で述べたように循環系の四大要素とアウトプットの関係をもう少し明確にしてみよう。〔生活〕からでてくるものは労働力、資本、土地

に代表されるような〔生産〕に必要な要素であり、これらの要素の最適配分により、安定した、最大あるいは最適な生産量を確保することができる。生産物は複雑な流通経路および輸送ネットワークを経て、市場へ運び込まれる。市場では自由競争をさまたげる制度・組織が存在し、また国家の介入もある。価格の決定メカニズム、市場のもつ特性は生産者である地域住民への所得に大きな影響を持つ。単に所得の増減という総体としての変化だけでなく、所得の配分にも密接に関係してくる。これは住民の生活基盤の基本となるものである。ここで考えなければならないのは、住民とは誰を指すのか、また、配分とは何であるかということである。発展途上国の人口の大半を占める農業従事者の所得の向上、配分の公平化は、開発の大原則であろう。所得の増大、適正配分は市場規模の拡大および生産へのインパクト、すなわち、労働力の質的变化（意欲の増大等）、投資能力の拡大という形で循環していくであろう。

この発展性のある循環系は閉鎖的、因果的社会構造の打破、開発意欲の増大、貯蓄率の増加、生産の安定、市場の拡大等後進性からの脱皮へ作用し、それが結果的にこの循環系をさらに充実させ拡大していくことになるのである。この作用・反作用、因果関係の顕在化は循環系の体系化に必須の条件である。さらにこの循環系は、住民の価値体系および地域機能と密接に結びついて血の流れた機能として「Take-off」の原動力となるのである。

Fig.4 地域開発の循環系



第2章 住民の価値体系

2-1 価値観と価値体系の定義^{※1}

価値観とは、一定地域に居住する住民が共有する判断基準である。これは、性・年齢・階層等の地位・役割関係の相違により異なるが、全体として統合を持ったもので、そのような統合された全体を価値観と区別し、“価値体系”と呼ぶことにする。

開発あるいは援助というものが、資機材・技術・資金等の形で行なわれる場合でも、経済という社会維持のための一分野に投入されるものである以上、大きな社会全体へのインパクトであり、“革命”と呼んでも大袈裟ではないものである。

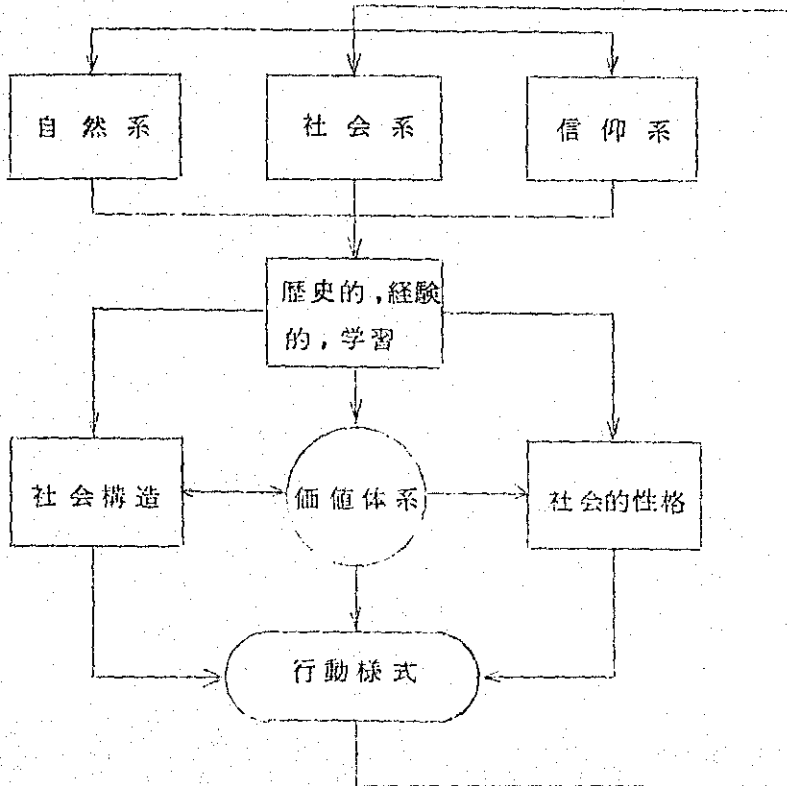
我々は以上の認識の上で開発あるいは援助を進めて行く限りにおいて、社会的摩擦をできる限り、極小にするように、また、できる限り現存する社会と整合するような方策を考慮する必要がある。

それにはまず、対象社会を認識しなければならない。対象社会の認識とはただ単に社会制度や社会慣習を知るだけではなく、その背後にある価値体系をもとらえて、前者との相互関係を認識するのである。

価値体系は、それ自体ダイナミックなもので、常に修正が加えられていると考えてよい。但し、その動態のスピードは、社会によって異なる。都市社会と村落社会を比較した際に、一般的には、前者の方が速い。

いいかえれば、都市社会は、流動的な価値体系であり、様々なレベルでの相違が著しい。また村落社会では、至って固定的な価値体系であり、非常に統合されたものであるといえよう。価値体系とか、社会構造、社会的

Fig. 5 価値体系とそのDynamics



性格というものが人々の行動の結果として、その社会の構成員の個人の内部に形成されるのであるが、行動の規制は同じ条件で働くのであるから、個人の価値体系や性格は共通な面を多くする。それ故、我々は、この価値

体系を追求することが必要になってくる。

2-2 行動分析

我々が知りたいのは、対象社会住民がどのような生活をしているのか、どのようなことを考えているのか、ということである。それにはまず、日常の一般的生活の様式や習慣をとらえることである。日常的な行動である生活様式や習慣は祖先から、歴史的、経験的に獲得されていたもので、それらは統合された全体としての価値体系に組み込まれている。

人間社会において、社会を崩壊しようと意図する社会制度はない。社会全体が統合の目標を持って、社会の制度が設けられている。このような中で、どのような個人が、どのような位置にいるのか、そしてその個人が社会から期待される行動は何なのか、という点からの行動の分析が必要になる。このためには、その地域社会の構造と諸制度のフレームの把握なしには行なえない。

個人における性格は心理学の分野でとらえられてきたが、性格というものが一定社会において共通する面、すなわち社会的性格について言われる様になったのは近年のことである。社会的性格 (social character)^{※2} は、社会という環境に規制され、あるいは期待されたその社会の構成員大部分が保持している性格である。この社会的性格はその社会の価値体系と密接に関係しあうものである。

以上は行動をとらえるための大きな視点であり、人々の行動を規制する枠は大きく区分して、自然、社会、生産、宗教等があり、それらの条件のもとで人々は行動するのである。

価値体系とはその行動の結果であると言える。行動した結果は、物質・精神の両面にわたり、態度や価値観、知識が精神的な結果の蓄積となり、次の状況の判断の基準となるものである。このような一連の関係は個人の学習の結果として、個人内部に確立されるものである。

このように考えた場合、援助・開発という新しい状況に対して、対象地域住民が反応するのは、過去の経験とその社会から学習した態度や価値観や知識である。

2-3 社会構造と価値体系

一定社会に属する構成員はその社会において、どの位置にあるのか、また彼に課せられた役割は何なのかということを把握する必要がある。

社会構造とはいくつかの社会の制度の多様な相互関係を示すものである。一つの社会を制度として研究することは、ある目的のためには役立つかも知れないが制度と個人との関係を無視しがちである。それ故、一定地域社会の諸制度の統合としての全体から社会構造を把握し、その構成員の位置関係による期待される行動を追求する必要がある。

基本的に社会は若干の共通する特徴を有している。即ち、あらゆる基本的社会は、第一に、その構成員を年齢と性の相違に立脚した様々な範疇に分けられる。第二に、ある種の個人や個人の集団を、それが占める専門の職業に基づいて、その社会の他の構成員から区別している。第三に、常にその組織の中に、より小さな、それ自身の組織をもった単位を含んでおり、それは次の二つの種類に分けられる。(1)家族集団、この集団は、実質上あるいは形式上の血縁関係に基づいた成員からなっている。(2)共同集団

(association group)。この集団は、共通の気持か共通の利益、あるいはその両者に基づいた成員からなっている。第四に、すべての基本的社会は、その社会の個々の構成員と、上記のような組織体系によってつくられた単位としての集団との二面を持つ。いずれも、それぞれの社会的重要性やそれに伴う影響力に応じて、上下関係の系列 (prestige series) —階層—の中に配列する傾向をもっている。

社会構造と価値体系は、その社会構造の中の位置による相違を把握する上で重要なものとなってくる。

2-4 社会的性格と価値体系

一定社会に生まれたものは、その社会に適応するように、何らかの教育やしつけによって育てられる。ある部族では、一定の儀式をいくつか経ることによって、成人の資格が付与される。また世襲的制度が強い場合は、その生まれた家により、育児方式が違ふ。性によってその期待される成人像が大きく他の社会と異なることもある。

その社会が小さな規模である場合、社会的性格はその近似性を大きくしその同じ方向にあるものに、地域社会の統合性の強いもの等がある。

社会的性格とは E. Fromm によれば、個人の性格からあるものを抜き出したもので、それは、一つの集団の大部分の成員がもっている性格構造の本質的な中核であり、その集団に共通な基本的経験と生活様式の結果発達したものである。社会的性格が以上のような人間の行為、態度等にかかわる以上、価値体系と密接な関係^(註)にあり、ともに把握されねばならないものである。

② D. Riesman は、アメリカ人の社会的性格を歴史的・社会的条件の変化と対応させて分析をした。“Lonely crowd”※3。

しかし、S. M. Lipset はその説を批判し、社会的性格が社会独自の価値体系または観念、信念、イデオロギーの体系によって決定的に変化させられると主張した。※4

2-5 価値体系の分析・評価方法

ケース・スタディとして、技術導入と価値体系の関連を取りあげる。

ある技術を導入するか、否かの判断は、今まで開発・援助側が一方的に下していた傾向にある。援助・開発が対象社会のためである以上、彼らが新しい技術を維持し、新技術を適応しなくてはならない。それ故、住民の価値体系を把握することは不可欠である。

ここでは、価値体系を言語、超自然観、思考過程、学習（訓練）、組織、教育（伝承）で代表させて分析を進める。

言語は価値体系の表象として、超自然観は、その価値体系の骨格として、思考過程はその回路として、学習は価値体系の形成過程として、組織は社会としての価値体系推進の代表として、教育は彼らとその価値体系を継承して行くものとしてとらえている。

これは価値体系というものが動態として人間に関与する立場からのものであり、価値体系は、人間によってつくられ、そして、人間を規制する。新しい状況は、価値体系を大きく変換する可能性を示し、変換する以前のもとの新しい価値体系は互いに矛盾し合うものである。そこにはとまどいがあり、試行錯誤の後に新しく統合の方向に向うものである。

我々は、価値体系を認識のレベル、操作レベル、管理レベルという、技術レベルに対応させてとらえて行くことにする。まずは彼らの価値体系の現状をとらえて、我々なりに組み立てる必要があり、その際にこの図(Fig. 7)を分析の手だてとして使用する。分析の際は次の図のようにタテ型全体のマトリックスとしてとらえ、ヨコ軸の段階を考慮しつつとらえる。

次に価値体系の中に新技術の導入による変化をとらえる場合には、ヨコ軸のどの段階まで、彼らの価値体系で説明できるかをとらえる。その段階を越えた技術導入をするならば、価値体系をふまえながら彼らを教育する必要がある。つまり、彼らの思考形態に対応するような教育方法を導入せねばならない。

Fig. 6

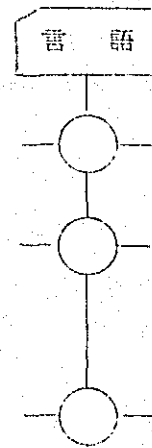
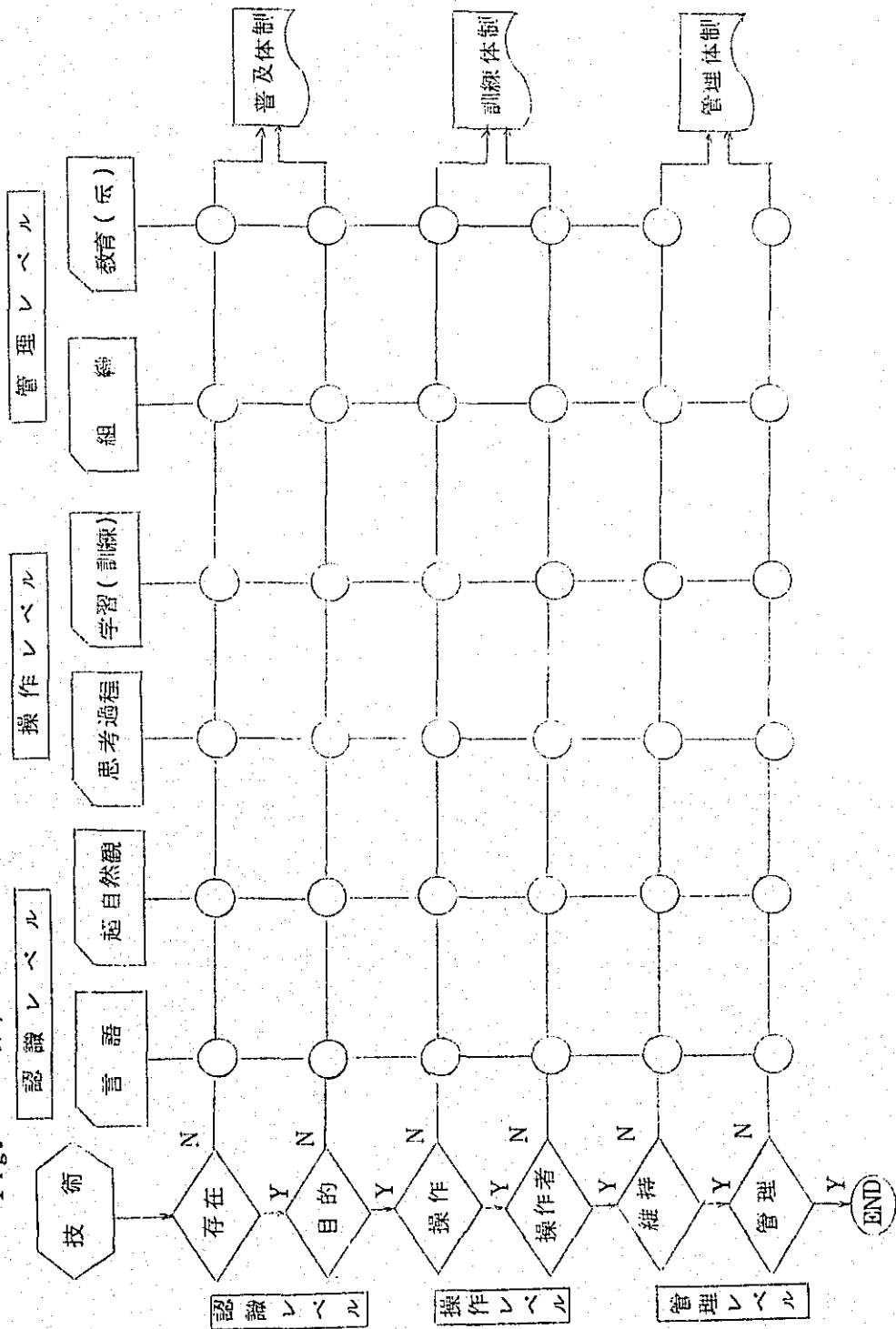


Fig. 7 分析, 評価のフロー



価値観・生活様式・社会構造と技術導入

1. 図の概念

input	タテ軸	技術のレベルと内容の展開を意味している。
	ヨコ軸	対象社会の価値体系とそれに準ずるもの。
output	ヨコ軸	普及，訓練，管理体制に考慮する事柄を示している。

2. 判定の基準

(1) 存 在	inputされた技術の存在の認知
(2) 目 的	その技術の目的の認知
(3) 操 作	その技術の操作・取り扱い方の認知度合い。
(4) 操 作者	その技術の操作経験者の有無
(5) 維 持	その技術の修理・改善の可能性
(6) 管 理	その技術の管理可能性

3. 価値体系とそれに準ずるもの

(1) 言 語	言語を介して，説明・訓練を行なうのであって，絶対に共通言語習得方法が前提として確立しなくてはならない。上→下はその言語の複雑度合いも示す。
(2) 超自然観	対象社会の価値体系の重要な部分であり，新技術の導入により変革される可能性が大きい。
(3) 思考過程	対象社会の持つ思考過程であり，説明・訓練の時，要する思考過程（数・科学性）
(4) 学 習	技術習得に用する学習の過程（援助側の教育）
(5) 組 織	技術の維持・管理を行なう組織過程
(6) 教 育	技術の住民自らの普及教育過程（住民の，住民による，住民のための教育）

[文 献 リ ス ト]

(1) 価値観・価値体系の定義について

- ※1 “Values and Value-Orientation in the theory of Action” C.Kluckhohn
in “Toward a General Theory of Action”
T.Parsons & E.A.Shils (Eds)
Cambridge, Harvard Univ. Press, 1951
“The Daynamics of Culture Change”
— An Inquiry in to Race Relations in Africa—
Bronislow Malinowski
London, Yale Univ. Press, 1961

(2) 社会的性格について

- ※2 『自由からの逃走』 (E.Fromm, 日高六郎訳)
※3 『孤独な群衆』 (リースマン, 加藤秀俊訳)
※4 『変化するアメリカ人の性格とは』 (リップセット, 阿部齊訳)

第 3 章 地 域 機 能

3-1 地域とは

地域とは、人間の日常行動から見た場合、少なくとも単一の機能を有する平面的な広がりを指し、個人の行動としてとらえているのではなく、社

会的集団としての行動範囲をいうのである。地域の最小単位を集落とし、集落の複合体は、さまざまな機能の分化基準により決定される。

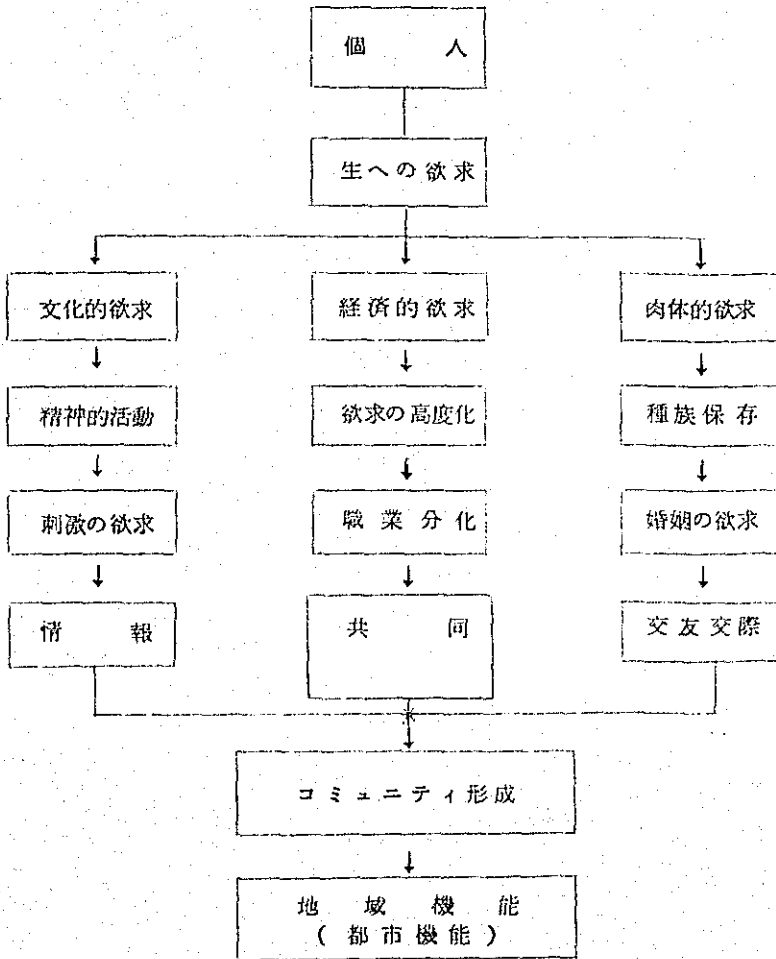
3-2 地域機能の定義

地域機能を定義する前に、コミュニティ形成について考えてみよう。人間の社会あるいは集落形成の源は、文化的、肉体的、経済的欲求であり、ここから自然発生的にコミュニティが形成されると見なすことができる。自然発生的に形成されたコミュニティが歴史的な流れを通し、いかなるインパクトにより地域機能分化過程へと入っていくのだろうか (Fig. 8)。

小さな社会集団として、完結されたひとつの生活空間として外部との接触を断っていた自給自足的な社会体制が経済的活動を通し、あるいは文化的活動を通し崩壊していくのである。経済的には物の交換により行動範囲の拡大がもたらされ、文化的には人間が精神文化を所有する生物であり、その文化は独立した個人により成立するものではない。文化は人間の互いの認識を通し、享受できるものである。精神文化の共有ということからも地域社会の発展的形成過程を見出すことができる。文化的な地域の拡大も経済的な地域の拡大も情報の交換を媒介して行なわれる。また肉体的には、種族保存に起因する婚姻があり、これは直接的あるいは間接的な交際なくしては成立しえないものである。以上簡単な現象をとらえてコミュニティすなわち地域社会の形成過程について述べてきたが、結論としては、人間は本来、集団としての存在であって、完全に孤立した状態で生存に耐えうる生物ではないといえる。

地域社会が形成された後、そこには、自ずと機能あるいは役割分担が発

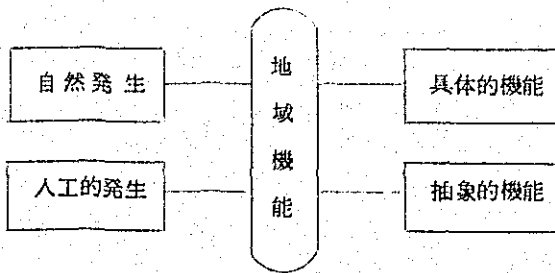
Fig. 8 コミュニティの形成過程



生してくる。地域機能はこの分化の形態を指すのである。機能には、自然、気候、風土等に起因する自然発生的なものと、歴史、社会等の発展に伴い拡大、発展してきた人工的機能とが存在する。また空間的な存在として確認できるものと、実体として数量的にとらえられない機能とがある。たとえば、経済的活動（物々交換等）は歴史的発生の段階で考えると自然発生であり、これはまた空間的存在として（生産や市場）数量的に把握できるものである。しかし、経済情報の交換は機能ではあるが、数量として実態を把握しがたい媒体である。また、社会の高度化に伴い行政機能の発生は、中枢管理機能、教育機能等社会の発展に伴い、ますます拡大する性質をもっている。（Fig. 9）

ここで本論に戻ると、人間社会の行動半径の拡大、および、その質的变化により、生活の新しいパターンが形成され、地域内あるいは地域間において顕著な機能および役割の分化が生ずる。このような社会活動の基盤となる地域における機能分化の形態が地域機能であり、それにはいくつかのレベルが考えられる。Fig. 10は、三つの異った機能をもつ地域A、B、

Fig. 9 機能の発生



を考へ、その分化のレベルを図化したものである。完全な機能分化と完全な複合化の他に4ケースが考えられる。これら6つのケースは、地域の分化を把握するための一つの判

断基準である。この平面的な機能分化基準（地域の平面分化）と機能の構成要素との三次元的な関係が地域機能の分化を最終的に決定するのである。この機能の分化の形態は時間的变化，たとえば，長期的には過去，現在，未来という時限で眺められ，短期的にはサイクルとしての変動（乾期，雨期で表わされる季節変動等）としてとらえられる（Fig.11, 12）。

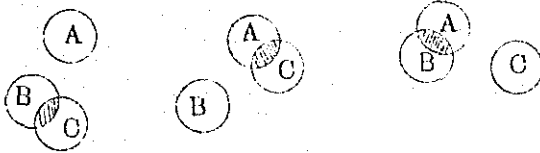
Fig.10 平面的な地域機能関係

1. 完全な機能分化



* A, B, Cは異なった機能を持つ地域の最小単位

2. 機能分化と複合化の同時性



3. 不完全な複合機能



4. 完全な複合機能



Fig. 11 地域機能の長期的変化(例)

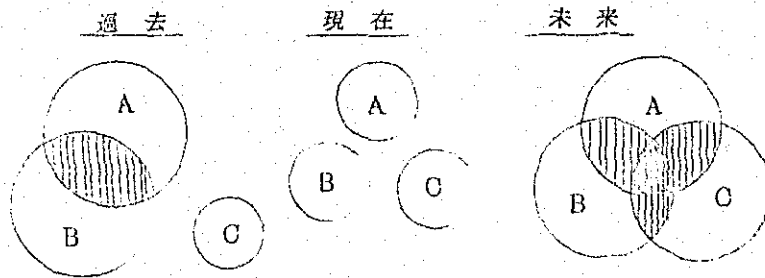
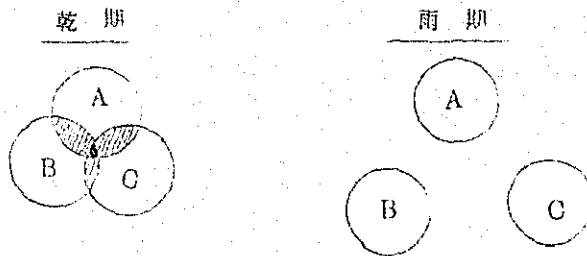


Fig. 12 地域機能の短期的変化(例)



3-3 地域機能の構成要素

地域機能を構成する要素を列挙すると、

- 1) 自然
 - a) 地形
 - b) 地質・土壌
 - c) 気候・風土
- 2) 行政

- a) 行政機構（中央，地方）
- b) 内容（担当分野）
- c) 行政組織
- d) 公務員
- e) コントロール

3) 制度

- a) 土地所有形態
- b) 住民からの自然発生的自治組織

4) 生活および行動空間

- a) 人口（年令，性，出身地，職業，家族構成，種族）
- b) 日常行動
- c) 年中行事
- d) 交流
- e) サービス（電力，ガス，水道）
- f) 休息，レジャー
- g) 衛生環境

5) 経済フロー

a) 生産要素フロー

- a - 1) 土地…土地利用，土地所有
- a - 2) 労働…労働者数，雇用状況（過少雇用の状態），質，労働条件（賃金），年令，雇用形態，契約，コスト
- a - 3) 資本…地主，金融業者，所有形態，金融機関，制度，通貨，契約

- a - 4) 原材料…種子, 肥料, 農薬
- a - 5) 農業機械, 関連産業構造と経営形態
- b) 生産物フロー
 - b - 1) 生産物…種類, 量, 価格
 - b - 2) 需要者…所得, 階層
 - b - 3) 交換の方法
 - b - 4) 市場…種類, 規模, 競争の状態, 価格決定メカニズム
- 6) 教育
 - a) 制度
 - b) 機関
 - c) 生徒と教師(意欲, 質, 年齢, 性, 家の財力)
 - d) 就職先
 - e) 教育のレベル
 - f) 社会教育
 - g) 教育への投資
- 7) 宗教
 - a) 種類
 - b) 組織(機構, 地位)
 - c) 聖地
 - d) 信者(出身, 年齢, 性, 数)
 - e) 儀式
- 8) 医療
 - a) 病院(種類, 規模, 能力, 設備, 事務員)

- b) 医薬品
 - c) 医者
 - d) Health instructor
 - e) 看護婦
 - f) 救急態勢
 - g) 患者(病名, 疾病率, 死亡率)
 - h) 病源
 - i) 災害
 - j) 伝統的医薬体系(呪術)
- 9) 治安
- a) 軍隊
 - b) 警察
 - c) 治安施設
 - d) 治安要員(兵隊, 警察官, 一般, 出身地, 種族)
 - e) 罪(人, 種類, 内容, 時間)
- 10) 輸送
- a) 旅客(目的, 量, OD(発着), 方向)
 - b) 貨物(品目, 量, OD(発着), 方向)
 - c) ネットワーク(国際的なネットワーク, 幹線, 支線)
 - d) 輸送機関(航空機, バス, トラック, 客貨車, 船, イカダ, 人力, 畜力)
 - e) 施設(飛行場, 道路, 鉄道, 橋, トンネル, 水路, 附帯施設)
 - f) 燃料, 修理

11) 情報

- a) ラジオ
- b) 新聞
- c) 雑誌
- d) 郵便
- e) 電信, 電話
- f) 伝統的伝達手段, 方法
- g) 機関
- h) 施設
- i) 人

これらの要素について簡単な解説を試みるが、いずれも時間的変化、平面的分化という2つの面からながめることができる。

地域機能構成要素として、まず「自然」をとりあげたが、これは人間社会の機能分化の土台として考えられるためである。平地、丘陵地、山岳部では、人間の行動様式は異なるはずであり、同様に地質、気候風土は機能分化を左右するほどの大きな要素である。気候といつても、寒帯～温帯～熱帯というよりなとりあげ方も考えられるが、地域開発をする場合最も重要な気候条件は開発途上国で特徴的な季節変動（雨期と乾期）であろう。これは以下で説明するある種の要素（生活および行動空間、経済、医療、治安、輸送、情報）の機能関係を大巾に変えることもありうる。

「行政」と「制度」について、「行政」は上から政治組織を通じて国家がコントロールするものと考え「制度」は上からの組織とはかみ合わない

伝統的な地域住民のもつ自治組織とする。「行政」を担当する機構は大きく分けて中央政府と地方政府に分けられる。

いずれも複雑な組織と人脈により構成されており、その担当分野を明確にすることにより行政コントロールのレベリングを行なうことができるであろう。特にこれは、プロジェクトを推進する場合、明確にしておくべきものであり、複雑な権力争いに巻き込まれ、プロジェクトの本質を見失なうことがないようにしなければならない。

「制度」は前に述べたように下からの政治制度を指すものであり、伝統的な土地所有形態を通じて形成されたものであろう。この要素は、「住民の価値体系」の中心テーマでもあるので、ここでは詳細な説明は省くことにする。

「生活および行動空間」は住民の行動パターンを平面的にとらえたものである。まず「人口」の分布を知ることが必要である。この人口分布の時間的（1日、1月、1年）変化を知ることにより生活面からの地域の結びつきを知ることが可能となるであろう。これは住民をとりまく生活環境の機能分化をも含めて考えるべきである。

「経済」循環を平面に張りつけようとする場合、考慮すべき項目を5)で列挙してある。生産要素のフローからみた場合と生産物のフローからみた場合が考えられる。生産要素には土地、労働、資本、原材料、生産手段があり、これらの位置関係により生産の効果がかなり変ってくるものと思われる。生産物のフローでまず考えなければならないことは、需要者の分類であろう。平均的な所得の大きさだけでは不十分で、所得の配分状況を充分考慮した所得階層別分布を考える必要がある。同時に交換がいかなる

Fig. 13 生活および行動空間

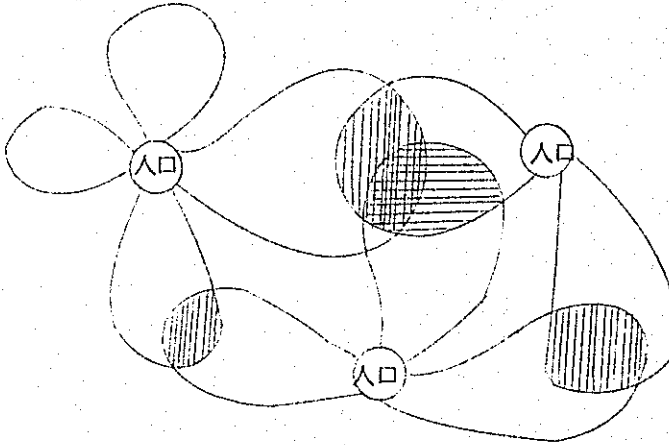
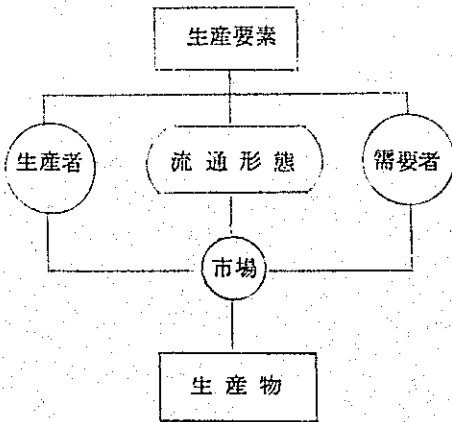


Fig. 14 経済フロー

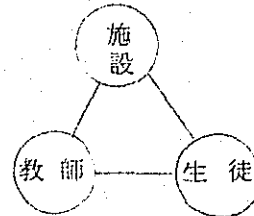


形態で（貨幣価値が関係してくる）なされているか、また交換の場としての市場における取引規模、競争の状態、価格決定メカニズムの地域差をとらえることは重要である。生産要素のフローと生産物フローの両方に関わってくる流通形態は、その実態を直接把握することは困難であると思われるが、土地所有形態等から派生してくる流通網や人間関係の概要により推測

できるものと思われる。

「教育」は教師と生徒の地域分布および教育施設の位置と状況(質)によって、教育の機能分化を眺めることができよう。特に教育レベルと所得階層分布および教育を受けた生徒の就職先の関係を見ることは興味あることである。

Fig. 15 教育機能



「宗教」は長い歴史的過程を経て確立された機能関係を示すものであり、聖地を中心に住民の行動と精神的結びつきをみる上で参考になる。

「医療」は住民の健康状態と密接な結びつきを持ち、医療環境を正確に把握することは住民の福祉のみならず地域開発のベースとしても必要である。発展途上国の場合、医療の水準(総合病院、開業医、および薬局)およびその態勢が地域社会のかかえている医療状況に合わない場合が多い。病源、災害の種類、患者の発生状況、伝統的な医療体系を総合的にとらえ、住民が地域開発の主体者として動きうる新しい環境(地域機能分化から考えた)をつくるべきであろう。

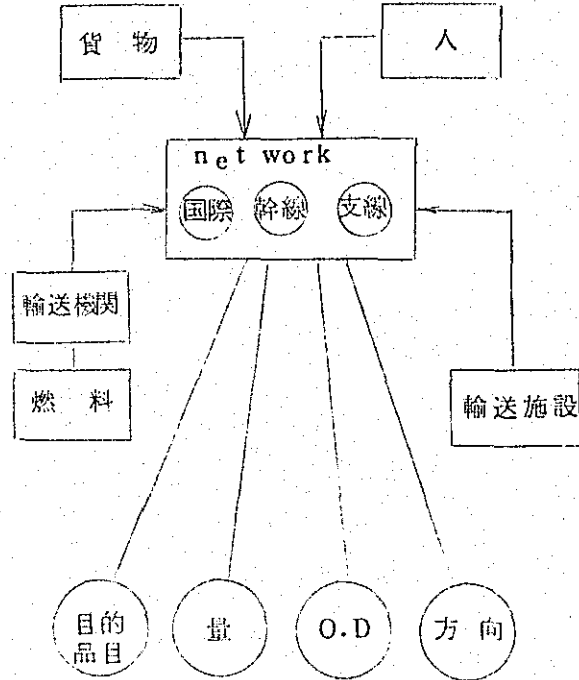
「治安」も医療の同様、住民の環境として考えることもできるが、非の主体者とその種類は直接住民のかかえている不満、問題点をつかむのに有効である。同時に治安体制と要員を地域的分担からとらえることにより、潜在的な住民の意識構造の地域差の一端がわかるであろう。

以上9つの地域機能構成要素についてその意味を述べてきたが、次にこれらの要素をつなぐ媒体としての「輸送」、「情報」を考えることにしよ

Fig. 16 輸送機能

う。

「輸送」の機能はFig. 16に示すような要素の集合として考えることができる。輸送は輸送される側（貨物，人）と輸送する側（輸送機関）に分けて考える。いずれも，①目的，②種類，③量，④OD（Origin-Destination）および⑤方向をもっており，ネットワークと重要な関係をもっている。ネットワークを構成する基盤として道路，鉄道，水路等の輸送施設があり，国際的



な性格のものであるか，幹線あるいは支線としての性格のものであるかによって機能を異にする。上にかかげた①～⑤までの項目は既に述べた地域機能（1）～9）から発生を規定することができる。

「情報」の機能も輸送と同様1）～9）の機能を円滑にするために存在するものである。情報源として何が使われているか，何をつかりべきかの判断は伝統的な伝達の方法と新技術の導入過程でなされねばならないが「住

民の価値体系」とも大きな関わり合いをもっている。「情報」機能の分化は特にプロジェクトの管理運営をする際に重要となってくる。

以上で9つの地域機能と媒体としての2つの地域機能の解説は終るが、これらの機能分化を別々にとりあげるのではなく、ひとつの総合化された機能としてとらえることに意味がある。「Take-off」のインパクトとしての地域機能分化をとりあげることは、地域開発のあり方を論じ、定式化する上で重要であろう。

第4章 地域開発構成要素の総合化についての試み

地域開発に必須な三大要素の総合化には、まず第一に開発目標の設定が必要である。ここでは、ある目標が設定されたと仮定して、物的な投入がなされた後、この投入がいかなる形で、三つの要素とからみあい、三つの要素がこの投入を通してどのような有機的關係にあるかを眺めてみよう。開発目標設定後投入されるものには物的なものも質的のものも存在するが、現段階では、これらの投入を総合的に把握するまでには至っていない。完結した総合化については次回報告することにし、今回は三要素の総合化の可能性をチェックするとどめることにする(2-3.アプローチの方法をよび Fig. 2 参照)。

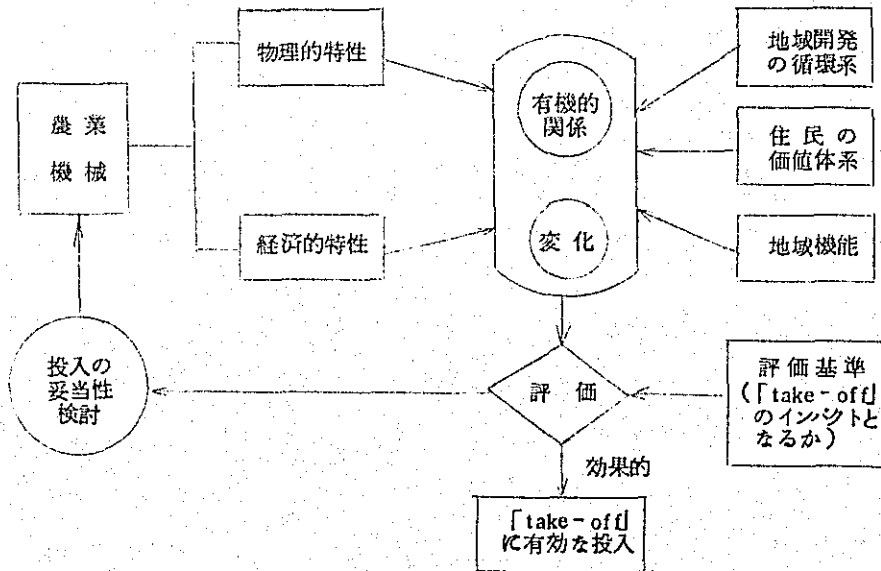
物的投入として「農業機械」をとりあげる。農業機械には耕耘用、除草用、薬剤散布用、収穫用、脱穀用、精米用等さまざまな用途が考えられるが、こ

ここではこれらを総合化した農業機械という単体を考える。

次に「農業機械」のもつ「特性」を考える。特性をとりあげる理由は次のとおりである。

- ① 開発対象地域に日本（先進国）でいう農業機械という言葉あるいは、その知識があるかどうか判定できない。
- ② 農業といっても国により、性格が異なる。
- ③ 農業機械は物理的特性のみならず経済的特性をも同時に保有している。
- ④ 三要素との対応関係を明確にする。

Fig. 17 アプローチの方法



農業機械の投入を「ある特性をもった物理的・経済的インパクト」として置き換えることにより、はじめて開発途上国における地域開発の新しい刺激となって存在価値が認識される。

Fig. 17はFig. 2を書き換えたものである（ただし、援助については未検討である）が、ここで少し詳しい解説をおこなう。物理的、経済的特性を背負った農業機械が開発されるべき地域に投入されたとき、地域開発の循環系の中で、どの部分に直接的に作用し、どの部分へ間接的な波及効果を引き起すであろうか？ また住民の伝統的な価値体系とどのように触れあい、その体系を開発に必要な新しい体系に変化させうるかどうか？ 地域の機能分担の構造変化が開発対象地域内および関連地域間に、いかなる効果をもたらすであろうか？ 農業機械というひとつの投入によってもたらされる地域の循環系、価値体系および地域機能分担の変化は適用の仕方如何によっては、はかりしれないほど大きいものとなるであろう。ただこの大きさが開発の方法を誤まることにより、社会不安、混乱を生ぜしめ、あるいは数年後に全く役立たぬ廃棄物と化すことは大いにありうることである。農業機械の投入により、とらえられた三要素の有機的関係及び変化を「『take-off』のインパクトでありうるか」（評価基準）により評価し、効果的であれば「投入は有効であった」ことになり、社会不安、混乱が生ずるようになれば、投入が妥当かどうか再検討する必要がある。また、再検討を加えても投入の有効性が予測されない場合は、投入の中止を行なわねばならない。あらゆる投入について効果が予測されない場合は地域開発と援助そのものに問題があることになる。このような判定は「Yes」「No」の二者択一というわけにはいかないので判定のためのウェイト付けを予め検討しておく必要がある。

投入の有効性についての判定の問題は次回の報告でおこなうことにし、ここでは特性と三要素との関係をさらに細かく分析する。

まず農業機械の特性を列挙してみよう。

① 物理的特性

- a) 農耕（生産～収穫～精米にいたるまでのすべて）
- b) 運搬
- c) 能力・能率
- d) 操作
- e) 故障・修理
- f) 危険性
- g) 維持
- h) 構造
- i) 体積・重量
- j) 動力源（ガソリン・人力・畜力）
- k) 耐用年数

② 経済的特性

- a) 省力化
- b) 特化・分業
- c) 時間価値（最も有効な時間帯を指し、時・日・週・月・年という単位で考えられる）
- d) Origin-Destination（移動の方向、発着別、範囲、量で規定される）
- e) 経済価値（財産および投資としての価値）

- f) 購入価格
- g) 附帯費(維持費, 輸送費, 燃料費等)
- h) 国産品
- i) 輸入品
- j) 供与

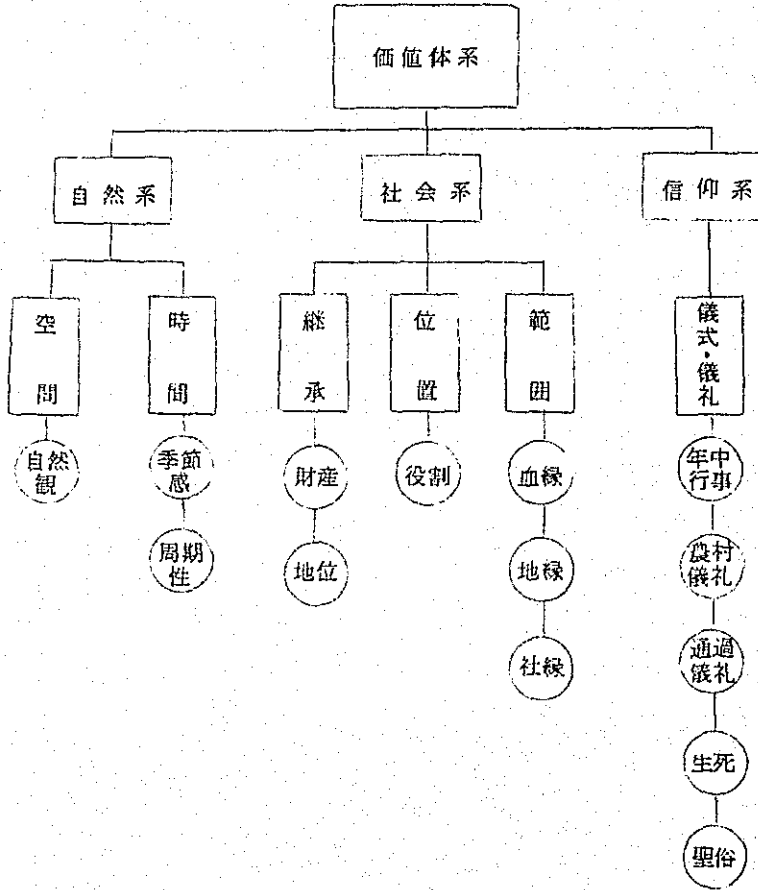
住民の価値体系の要素構成は Fig. 18 のようになっている。この価値体系は、自然系、社会系、信仰系より構成されている。しかしながら、価値体系はこの3つの分類にはっきりと区分することが難しい。ここであげた個別の要素は複雑に絡みあい、分類のわくを越えて考えられるべきものである。特に個別文化により相互の関係が変ってくるものである。

自然系は「空間」と「時間」という2つの視点から構成されており、信仰系とも強い結びつきをもっている。

社会系における「継承」、「位置」、「範囲」というものも正確に区分することが不可能であるが、便宜的に分類した。「継承」は相続の問題等を含み、世代間の継承を意味する。「位置」は、その地域社会の人々がつくりあげている社会構造上の位置である。社会系の3番目の要素である「範囲」は社会構造の中の社会組織がどのような人間関係により成立し、その大きさ(影響力)がどこまでなのかを指している。

信仰系においては「儀式」「儀礼」をとりあげ諸々の“区別”の原理をさぐることにある。教義や“神”についての認識は“表象”という意味で自然系や社会系と密接な関係を示しており、価値体系分析に大きな示唆を与えることになるであろう。年中行事は一年という周期性つまりひとつのけじめを示し、一年という期間の中でくりひろげられる様々な活動のスケジュールで

Fig. 18 価値体系の要素構成



ある。農耕儀礼は年中行事と密接な関連を持ち、農事暦という形で現われてくる。通過儀礼というのは人間が生まれて死ぬまでに必ず通過しなくてはな

らない節で、冠（成人式）、婚（婚姻）、葬（葬儀）で表わされる種類のものである。つまり、年齢の変化にともなう“区切り”である。生と死、聖と俗の考え方は、日常生活と特別な日の生活における“区別”をここでは意味している。

地域開発の循環系および地域機能はすでに各論で定義されたような要素構成となっている。地域開発の循環系では「生活」、「生産」、「輸送・流通」、「市場（生産物の）」、地域機能では「自然」、「行政」、「制度」、「生活及び行動空間」、「経済フロー」、「教育」、「宗教・文化」、「医療」、「治安」および媒体としての「輸送」、「情報」のレベルをとりあげることにする。

地域開発の構成要素が整理されたので、総合化の試みに入る。

農業機械が Project 地域に投入されることによって、地域（Project 地域より広域のものを指す）開発の循環系が変化する過程を簡単に述べてみよう。農業機械の Project 地域への投入は、まず地域の農産物生産形態の変化を誘発するであろう。この変化は質的、数量的、時間的変化である。投入の生産へのインパクトは、直接的間接的に生活様式の変化をも伴なうものである。後進地域へ投入された農業機械は、循環系の他の要素すなわち輸送における手段（輸送機関）としても活用されるであろう。また農業機械の経済的特性として流通形態および市場価格への波及効果も大きいと思われる。

農業機械の投入による影響は住民の価値体系との深い関わりあいをも持っている。それはひとつには生活様式の変化を通じて生ずる住民の考え方の根底にある価値体系の変化である。この価値体系は歴史的に長い時間をかけて形成されてきたものであり、短期間では変わりにくいものである。短期的に

みた場合、新しい技術（農業機械）の導入と住民の価値体系との触れあいは「Gap」としてあらわれるであろう。この「Gap」はしばしば社会不安や混絡の原因となりうる。

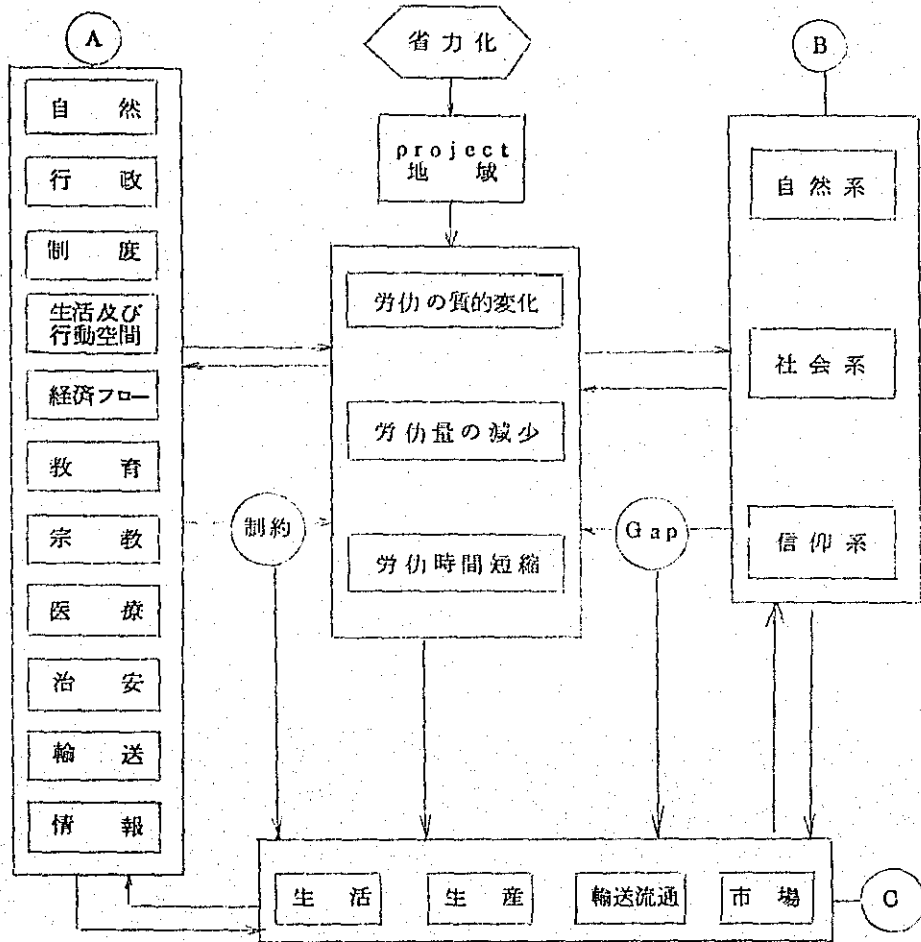
地域機能の分化も農業機械投入により変化を受ける。この場合も両者の間に作用、反作用の現象がみられる。間接的には生産形態の変化、生活様式の変化が地域機能の新しいパターンを生ぜしめるのである。直接的には、行政の機能分担、制度上の分化、輸送の機能分担の変化向上という形であらわれこれが地域の循環系を構成する生活、生産、流通、市場、輸送を上向きの循環系へと組み込んでいくのである。

ここで農業機械の経済的特性として「省力化」をとりあげる。この特性はまず「労働の質的变化」、「労働量の減少」、「労働時間の短縮」という形であらわれる。この変化により生じた地域開発の三大要素への直接的、間接的波及効果およびこれら要素間の作用、反作用の関係を図示したのが Fig. 19 である。

住民の価値体系とはどのような関係にあるだろうか。投入の最初の段階で自然系、社会系、信仰系で構成される現存の（歴史的過程の中で培われたもの）価値体系との摩擦が生ずるであろう。自然に対する価値観（自然観、季節観）は根強いものであるかもしれない。また労働の変化と社会的な継承、位置、範囲の変化との「time-lag」は通常大きいものである。さらに信仰を通じて形成された儀礼、年中行事は容易に変化しないものである。このように労働の質・量・時間的变化と住民の価値体系の直接的関係は短期的には「Gap」としてとりあげられねばならないものである。

次に地域機能をとりあげる。労働の質的、量的、時間的变化は行政の能率

Fig. 19 地域開発構成要素の総合化(試み)



* (A)地域機能, (B)住民の価値体系・(C)地域開発の循環系

的機能分化により影響を受け、逆に変化が行政の質的变化の一端ともなりうるのである。他の要素についても同様に作用、反作用の関係がみられるであろう。たとえば教育の質、制度、方式等により労働の質的变化は影響を受け、労働時間の短縮は教育のための時間的余裕を生み出すであろう。このように地域機能の分化は労働の変化により新しい発展性のあるパターンに変化し、反作用として労働の質、量、時間を開発のための上向きの要因として変化させるであろう。

最後に地域開発の循環系と労働の変化および住民の価値体系、地域機能とのつながりをみてみよう。労働の質的、量的、時間的变化は労働生産性の向上という形で増産の直接のインパクトとしてあらわれる。また農耕に費やす労働量と時間の短縮は生活に余裕をもたらすし、労働の質的变化は生活の質的变化を意味する。このように労働の変化は直接的には労働生産性の向上、生活パターンの変化として循環系に投入されるのである。間接的には地域機能の変化および、長期的ではあるが住民の価値体系の変化を通じて、さらに生産と生活の向上を促進するのである。住民の価値体系との「Gap」および地域機能からの制約は間接的、短期的な効果（マイナスの効果）として地域の循環系を制約する。

省力化という一つの要因により、地域開発の循環系はプラスとマイナスの効果を同時に受けるのであり、このバランスを十分に考慮した地域開発計画を策定することが、発展途上国の「take-off」を目指すことになるのである。

LIB